

邪馬台国時代の

いちはら

ここまでわかった市原の遺跡

第4回遺跡発表会



倭国東端の繁栄

市原市埋蔵文化財調査センター

■ 邪馬台国論争

中国「三国志」の「魏書」東夷伝倭人条、いわゆる魏志倭人伝に記事のある邪馬台国は、断片的な記載が多く謎を生み、今なお活発な議論が続いています。九州説、畿内説といった邪馬台国の所在地論や、ヤマト王権（大和朝廷）との関係については、江戸時代から活発な議論がありました。

江戸時代、国学者である本居宣長は、大和朝廷を絶対視する立場から、邪馬台国の女王卑弥呼を蔑視しました。オープンな議論が広く展開されるようになった戦後においても、男子世襲制の王権である大和朝廷と、「共立」されたとされる女王卑弥呼は、歴史的段階が異なるものとの考えが主流で、古墳については、大和朝廷の墓制と考えられていました。

長らく定説であった、古墳時代の開始年代、西暦3世紀末～4世紀初頭は、研究史を遡れば1950年代の崇神天皇の年代論を根拠としています。邪馬台国畿内説であっても、西暦247年頃に死亡したとされる卑弥呼は、あくまでも大和朝廷以前、古墳時代以前の人物であったわけです。

高度経済成長期になり、各地での大規模な発掘調査が行われたことから、次第に考古学上の成果が、議論の行方を大きく左右するようになりました。しかし、考古学では、遺跡、遺構、遺物から、西暦何年といった実年代を知る手掛かりはごく限られています。考古学の成果と、暦をもとに記載されている中国史書との対比は、考古学における年代のとらえ方がキーポイントになります（p.15参照）。

近年、自然科学的な年代測定法の進化もあり、古墳の開始年代が見直されるなか、奈良県桜井市纏向遺跡が邪馬台国の王都、纏向遺跡に隣接する箸墓古墳が卑弥呼の墓として有力視されています。現状では、邪馬台国の女王卑弥呼こそがヤマト王権成立の主人公になろうとしています。

しかし、考古学の年代と実年代の関係には、なお定説はありません（裏表紙参照）。

■ 邪馬台国と「いちはら」

邪馬台国は、中国王朝に認知された最初の倭国中央政権でした。しかし、この段階の倭国は邪馬台国を中心とする諸国連合体であり、魏志倭人伝には、邪馬台国とともに30余国の国名の記載があります。また、卑弥呼共立前には、倭国乱（西暦146年～189年頃）が、卑弥呼治世の間も、邪馬台国と狗奴国の抗争があり、卑弥呼の治世が倭国の安定ではありませんでした。

考古学では、この時期、九州から関東・南東北に至る地域で、遠隔地間の交流が急速に活発化することが確認されています。広域にわたる人々の離合集散があり、各地域で新たな国づくりを模索していました。「いちはら」にも、遠方各地から人々が集まり、東日本では有数の拠点となりました（p.3～5参照）。

その中心が市原市国分寺台地区であり、中台遺跡には、「いちはら」を治めた王の祭政施設である祭殿建物が建てられ（p.10参照）、神門古墳群、諏訪台古墳群、辺田古墳群には王墓が造られました（p.7～9、11～12参照）。

邪馬台国時代の国づくりの姿を、国分寺台遺跡群に見ることができます。また、「いちはら」の人々の一部は、東関東から南東北へ進出し、当地の開拓を主導しました。このように、「いちはら」の地、「いちはら」の人々は、邪馬台国時代の激動期に大きな足跡を残しています。

国分寺台地区は、西暦3世紀後半になると急速に衰え、姉崎地区が新たな拠点地域となりました。

■ 時期区分

本書での年代の記載は、「弥生時代後期」、「古墳時代前期」など、考古学の時代時期区分を用います。弥生時代後期から古墳時代前期の間、弥生時代終末期、古墳時代早期等と呼ばれる時期については、「弥生古墳移行期」と表記します。「弥生古墳移行期」をおおむね西暦3世紀前半の「邪馬台国時代」としますが、「邪馬台国時代」は、厳密な時代区分ではありません。

弥生時代の「いちはら」

開拓と環濠集落^{かんごう}

縄文時代晩期に、遺跡数が大きく減少した関東では、弥生時代中期中頃になってから、ようやく稲作農耕を伴う新たな開拓移住が始まりました。

「いちはら」では、この時期、東京湾岸平野や養老川、村田川の平野に接する台地上や、平野部の微高地上にムラの周囲に濠を巡らした環濠集落がつくられました。

弥生時代の環濠集落は、防御機能を持つムラとして、特に西日本では、中国史書に記事のある「倭国乱」に関連付けられています。東日本では、開拓の拠点としての役割を担っていたと考えられています。弥生時代後期になってからも、神奈川県から埼玉県大宮台地にかけての地域では、東海地方からの集団的な開拓移住があり、多数の環濠集落がつくられました。

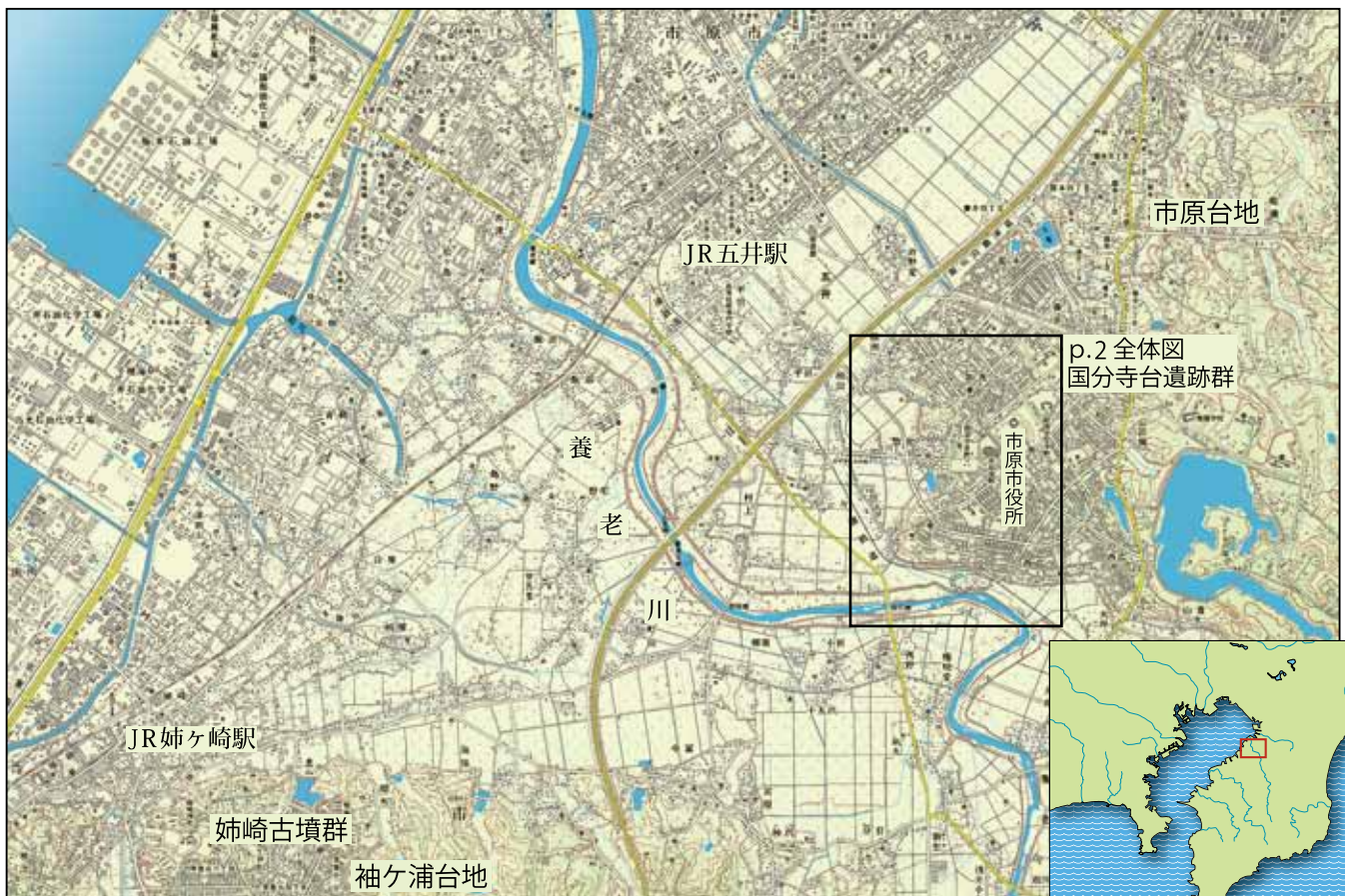
一方、「いちはら」周辺では、弥生時代後期初頭に環濠は埋没し、台地上広範囲に竪穴建物が展開する開放的で大規模な集落がつくられました。



● 国分寺台全景（養老川上空から、1978年撮影）



● 環濠集落 根田代(ねだい)遺跡



国土地理院 数値地図 25000 (地図画像) から



● 市原市国分寺台遺跡群

弥生古墳移行期・古墳時代前期の遺構
 天神台遺跡については、弥生時代後期の遺構を含む

- 発掘調査区
- 古墳など
- 竪穴建物など



遠方からの移住者

みなみなこんたい 南中台遺跡、なかで 中台遺跡、ちようべいだい 長平台遺跡

■「土器の移動」と拠点集落

西暦2世紀末から3世紀前半、邪馬台国卑弥呼^{ちせい}治世の頃、九州から関東・南東北に至る地域では、遠隔地間の交流が急速に活発化します。考古学では、人の行動を直接把握することはできませんが、こうした地域間の交流は、地域ごとに特徴が異なる「土器の移動」によって捉えることができます。

「土器の移動」には、①A地域の土器がB地域に移動する場合（搬入品）と、②A地域の土器の特徴を持った土器がB地域で製作される場合（見せかけの移動）があります。土器の交流については、交易を重視する考えもありますが、②は「移住」を想起させます。さらに、市原市南中台・中台・長平台遺跡などでは、①②の土器がその地域の特徴をもった竪穴建物から出土しています。竪穴建物の平面形態や、柱穴や炉、貯蔵穴などの配置には、土器と同様に地域ごとの特徴があります。こうした土器と竪穴建物の同時移動は、交易に伴う一時的な人の移動とは考えられません。

経緯は明らかではありませんが、おそらく、弥生古墳移行期の「土器の移動」の背景には、地域を大きく再編する人々の離合集散があったと考えられ、この時期、奈良県纏向遺跡^{まきむく}や福岡県比恵・那珂遺跡群^{ひえ}、岡山県津寺遺跡^{つでら}、大阪府中河内旧大和川流域の遺跡群^{なかかわち}、三重県雲出川下流遺跡群^{くもつがわ}、愛知県鹿乗川流域遺跡群^{かのりがわ}などの集落が新たに出現あ

るいは巨大化しました。

これらの集落に共通する特徴は、他地域の土器が多数出土していることであり、なかでも纏向遺跡では、出土土器のうち15%以上が他地域の特徴を持っていると言われています。

■邪馬台国時代の「いちばら」

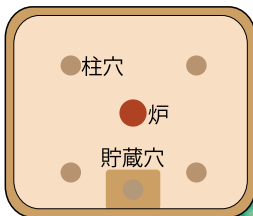
弥生時代後期の東京湾東岸地域の土器は、どちらかと言えば閉鎖的で、近隣地域の影響をあまり受けていません。しかし、弥生古墳移行期になると、突然他地域の土器が混在するようになり、一方で、「いちばら」周辺地域の土器は、下総台地から東関東・南東北地方へ進出します。同時に、



● 北関東系土器（栃木県） 南中台遺跡

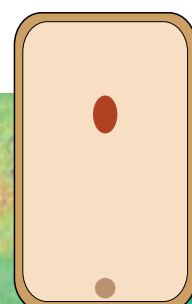


● 畿内系土器（タタキ甕） 中台遺跡

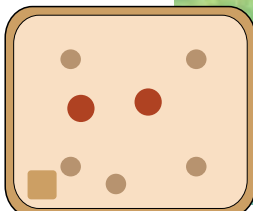


北陸系

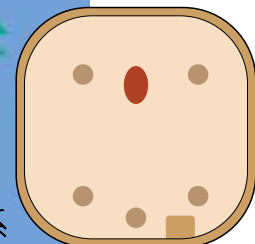
● 各地の竪穴建物形態



北関東系



東海系



南関東系

背景 天神台遺跡出土土器に描かれた船の線刻画

地域内の集落の再編が始まり、国分寺台地区に新たな集落群が形成されました。

国分寺台遺跡群では、近隣地域から、北関東（栃木・茨城）、東海（静岡・愛知）、北陸（石川・福井・新潟）、近畿（奈良・滋賀・三重）など遠方に至る各地の土器が出土しており、東日本では数少ない交流拠点でした。

■ 他地域系の土器と竪穴建物

南中台遺跡では、竪穴建物 2 棟からまとまって北陸南西部（石川・福井）系の土器が出土しています。このうち、竪穴 S113 は、北陸地方の特徴を持った竪穴建物であり、竪穴規模 8.0 × 9.5 m を測る集落内最大の竪穴建物です。中台遺跡北辺部の竪穴 0106 号の竪穴形態も、形骸化が進んでいるものの北陸地方の特徴を残しています。この竪穴 0106 号も、地区内最大規模の竪穴建物です。

長平台遺跡では、10 号竪穴から小破片ですが伊勢湾沿岸系の土器がまとまって出土しています。竪穴形態も東海系であり、東海系の竪穴建物は、他に 12・14 号竪穴があります。このうち 12 号竪穴が地区内最大規模の竪穴です。また、長平台遺跡では、288・289 号方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼから、搬入品を含む伊勢湾沿岸系の土器が出土しています。

■ 移住者の役割

他地域系の土器がまとまって出土する竪穴建物は、それぞれの集落で数棟程度であり、「征服」のような大規模な移住ではありません。

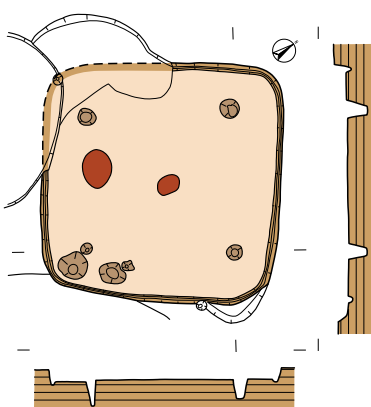
しかし、他地域系の竪穴建物は、それぞれの集落で最大規模の建物であり、移住者がリーダーあるいは指導者といった地位にあったと考えるのが自然です。移住者は、この時期、他地域と政治的・経済的な関係を構築していく中で、重要な役割を果たした可能性があります。

おそらく邪馬台国時代は、鬼道を用いた卑弥呼が王に「共立」されたように、リーダーとしての地位は、出自・血縁によるのではなく、個人の能力もとづくような社会であった可能性が考えられます。

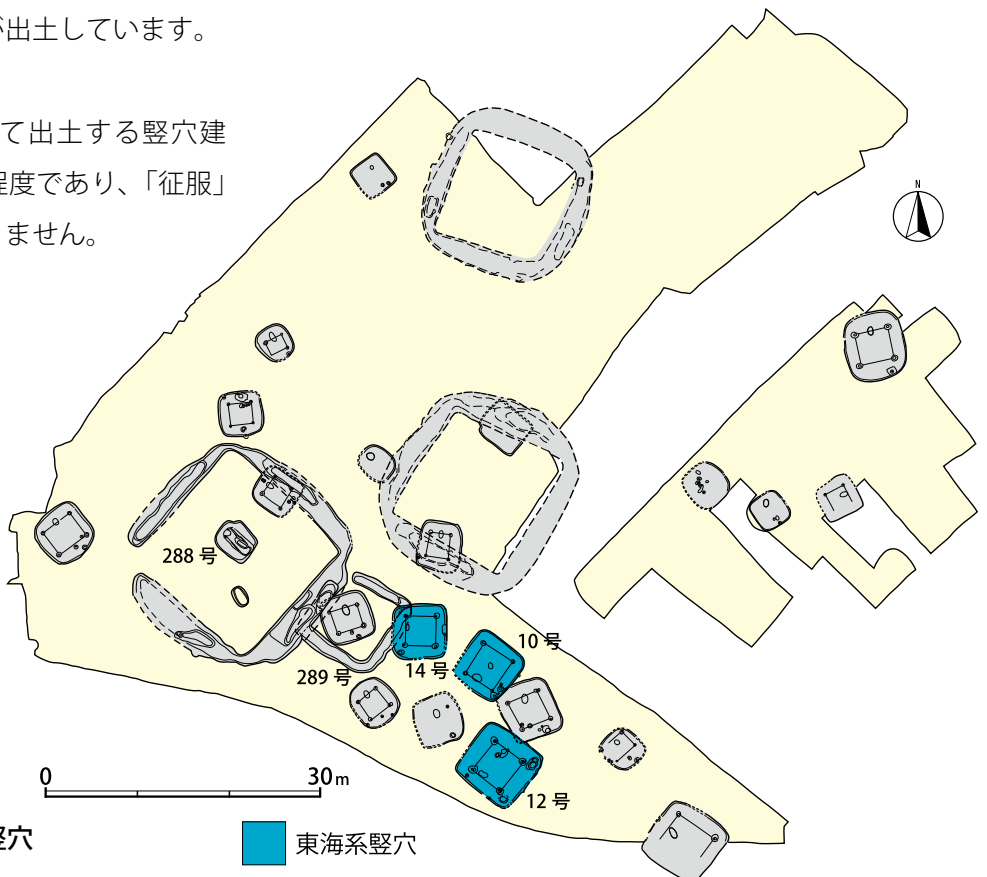


● 288・289 号方形周溝墓出土土器 長平台遺跡
右手前、左奥は伊勢湾沿岸地域からの搬入土器。
中央奥はその模倣土器。右奥は地元の土器。

10 号竪穴



0 5m



● 長平台遺跡 全体図、東海系竪穴

■ 東海系竪穴

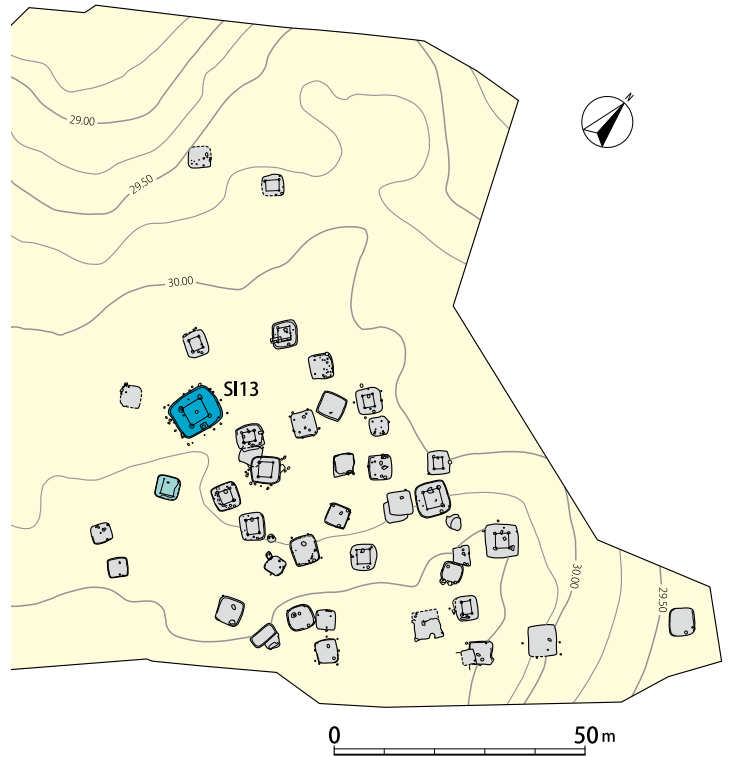


● 北陸南西部系土器 南中台遺跡

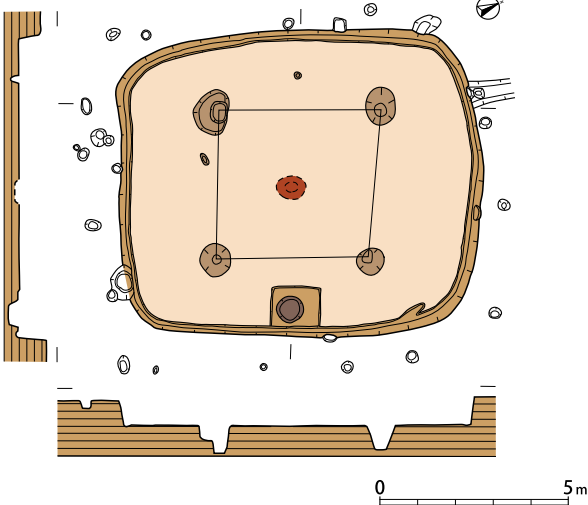


● 竪穴 SI13 南中台遺跡

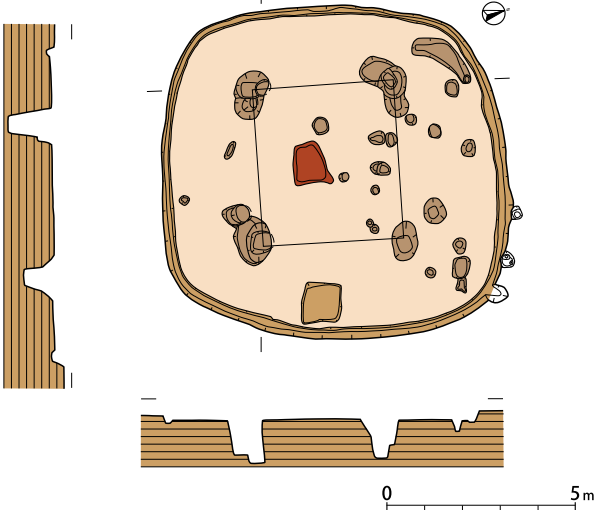
南中台遺跡全体図



南中台遺跡 竪穴 SI13

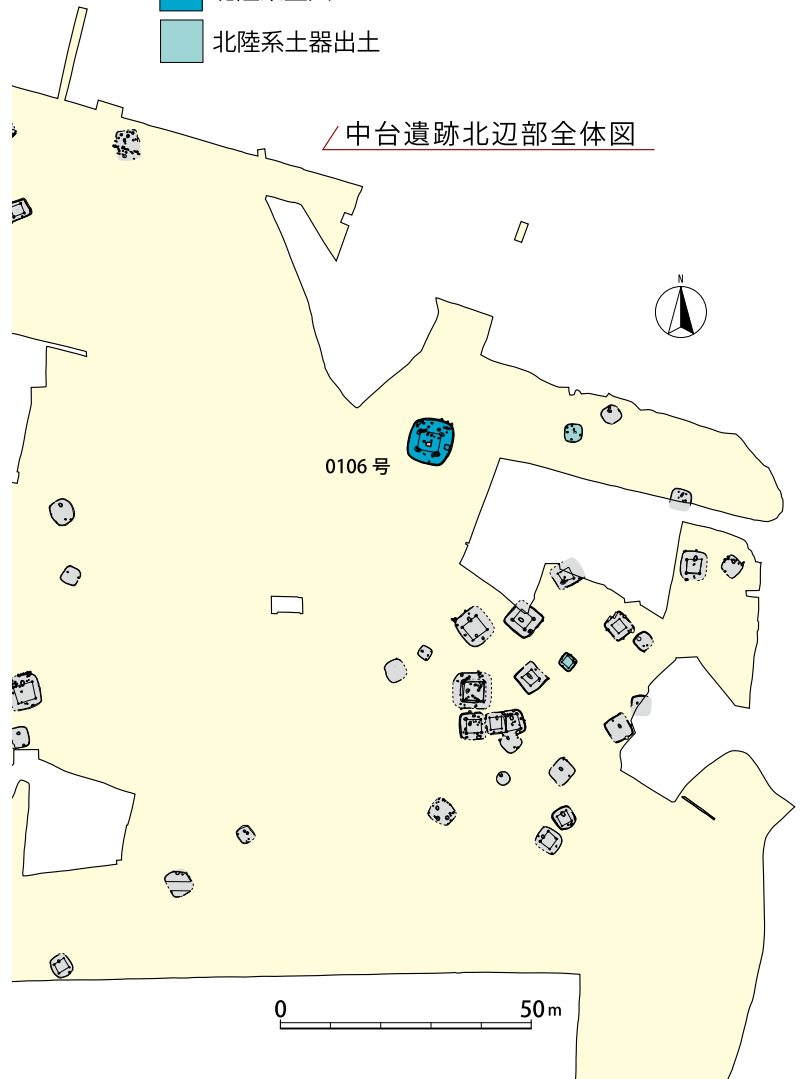


中台遺跡 竪穴 0106号



- 北陸系竪穴
- 北陸系土器出土

中台遺跡北辺部全体図



● 南中台・中台遺跡全体図、北陸系竪穴

さがけとなる「古墳」

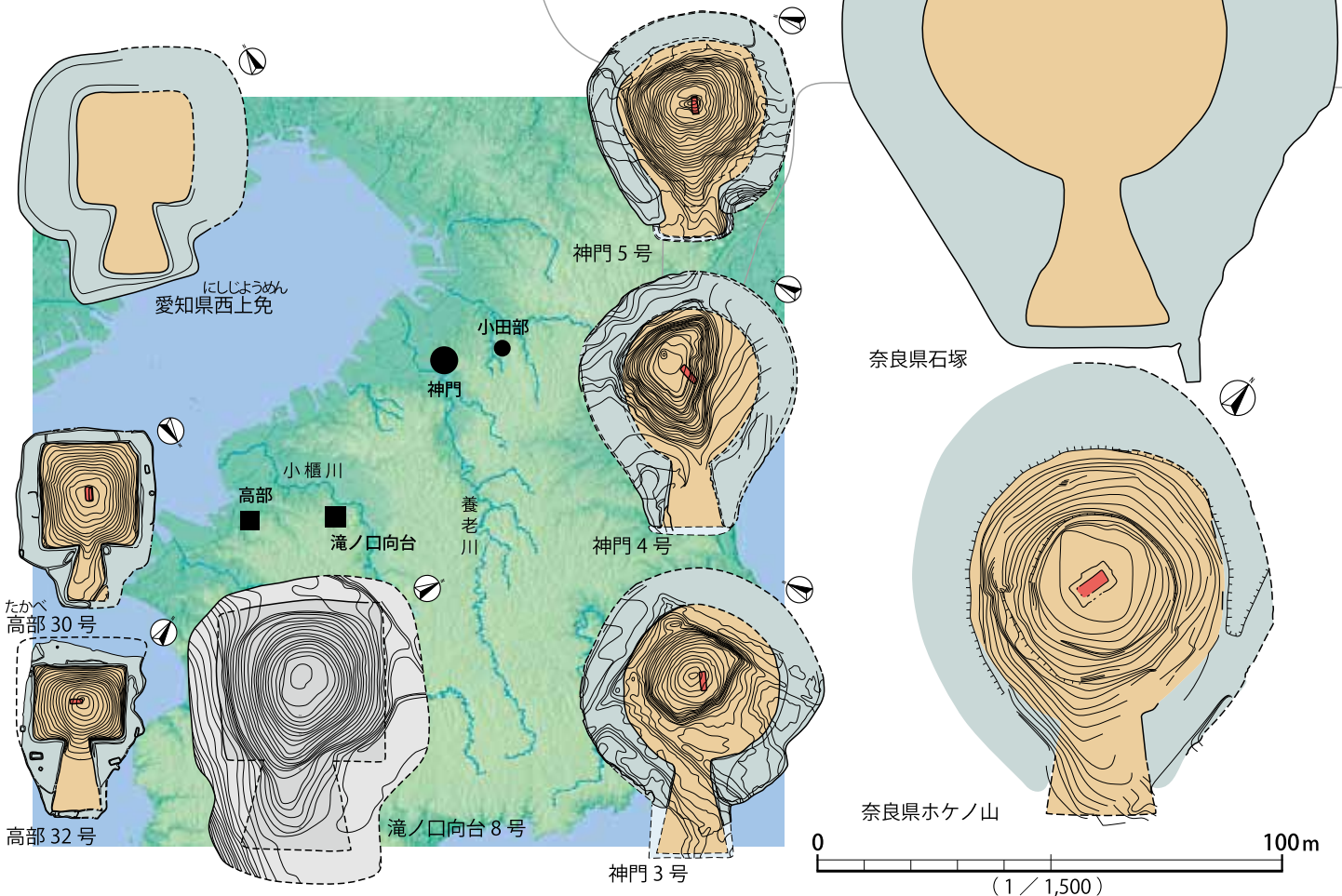
前方後円形と前方後方形

古墳時代は、ヤマト王権による共通の葬送儀礼のもと、前方後円墳を頂点とする古墳の形、規模、埋葬施設、副葬品などによって、被葬者あるいは継承者の地位・身分を表現した時代であり、古墳時代は、前方後円墳の出現をもって開始されます。最古の前方後円墳は、卑弥呼の墓としての説が有力な、奈良県桜井市箸墓古墳であり、全長 280m の巨大古墳です。

その前段、弥生古墳移行期、一部の地域では弥生時代後期に、西日本各地域で円形・方形の墳丘に突出部を付けた特殊な形の墓が出現しました。なかでも、円丘の一方に短い突出部を付けた「纏向型前方後円墳」は、定型の前方後円墳のさがけとなるものであり、纏向型前方後円墳の出現を持って古墳時代とする考えもあります。

弥生古墳移行期には、この纏向型前方後円墳が、近畿地方から瀬戸内海沿岸地域、北九州に分布するのに対して、「前方後方墳」が、滋賀県から伊勢湾沿岸地域以東に分布することから、前方後円墳を邪馬台国、前方後方墳を邪馬台国と対立していた狗奴国の墓制とする説があります。

奈良県箸墓古墳
墳丘長 280m



東国の^{まきむく}纏向型前方後円墳

神門古墳群

「いちはら」は、神門古墳群、^{おだっぺ}小田部古墳、諏訪台1号墳など「纏向型前方後円墳」がまとまって分布する東日本では特異な地域です。「いちはら」でも諏訪台古墳群など同時期の前方後方墳はありますが、規模などから神門古墳群に対して下位の墓制であった可能性があります。

神門古墳群は、中台遺跡の南西部にあり、周辺のムラを含めた地域の統合を象徴する「王墓」として、弥生古墳移行期に3基が相次いで造られました。このうち神門3号は、時期詳細が確実ではない木更津市滝ノ口向台8号を除くと、この時期の関東地方では最大規模の墓です。

神門古墳群の母体となる、この時期の中台遺跡西辺部 (p.10 参照) では、畿内地方に特徴的な器面を叩きしめたタタキ甕 (p.3 参照) が多数出土していますが、これについては、伊勢湾東岸地域を経由地とする可能性が強いと考えられています。畿内中枢地域との関係は、墳形以外確実ではありませんが、「纏向型前方後円墳」を創出したとされる、初期ヤマト王権 (邪馬台国) と無関係であったとは考えにくいと思われます。



● 神門5号墳



● 神門3号墳墳頂部出土土器



● 神門3号墳出土副葬品



● 神門3号墳

310基の墳墓群

天神台遺跡・諏訪台古墳群

■ 天神台遺跡と諏訪台古墳群

天神台遺跡・諏訪台古墳群は、中台遺跡の南側の支谷をはさんだ対岸の台地上に所在します。

縄文時代、弥生時代後期から古墳時代前期の集落と弥生時代の方形周溝墓群を「天神台遺跡」、古墳群を「諏訪台古墳群」と呼んでいます。弥生古墳移行期から古墳時代前期の集落は、対岸の中台遺跡と並ぶ「いちはら」の中核的なムラです。

■ 累々と連なる墳墓群

遺跡南半分は、長期にわたり墓所として使用され、弥生時代から平安時代9世紀頃までの間に、310余基の墳墓が累々と造られました。

墓所の歴史は、弥生時代中期後半に始まります。この時期は、台地先端の高所を中心に、方形周溝墓約70基が列をそろえて整然と並んでいます。

弥生古墳移行期は、台地縁辺部に前方後方形を含む方墳（方形周溝墓）が散在しますが、古墳時代前期初頭の頃、台地高所にまとまります。これは、墳丘径約40mの大円墳である諏訪台10号墳が契機となる可能性があります。10号墳は、周溝の部分的な調査しか行われていないため、時期詳細は確実ではありません。しかし、10号墳は、弥生時代の方形周溝墓とともに台地先端の最高所にあり、前方後方墳の9・11号墳を従えていることから、古墳時代前期初頭のものと考えています。この場合、10号墳は、神門古墳群を継ぐ王墓であった可能性が高いと思われます。10号墳は、現在、諏訪神社の境内で保存されています。

■ その後の諏訪台古墳群

諏訪台古墳群の墓造りは、古墳時代前期後半から古墳時代後期の間中断します。しかし、古墳時代後期中頃になると、10号墳を中心とする古墳時代前期の古墳を意識するように、その外縁部に前方後円墳、円墳群を造りました。7世紀には円形から方形に変わり、方墳は、古墳時代以後、9世紀代まで造り続けられました。



ばんりゆうきょう
● 盤龍鏡（中国鏡、径11.9cm） 諏訪台SS103号墳



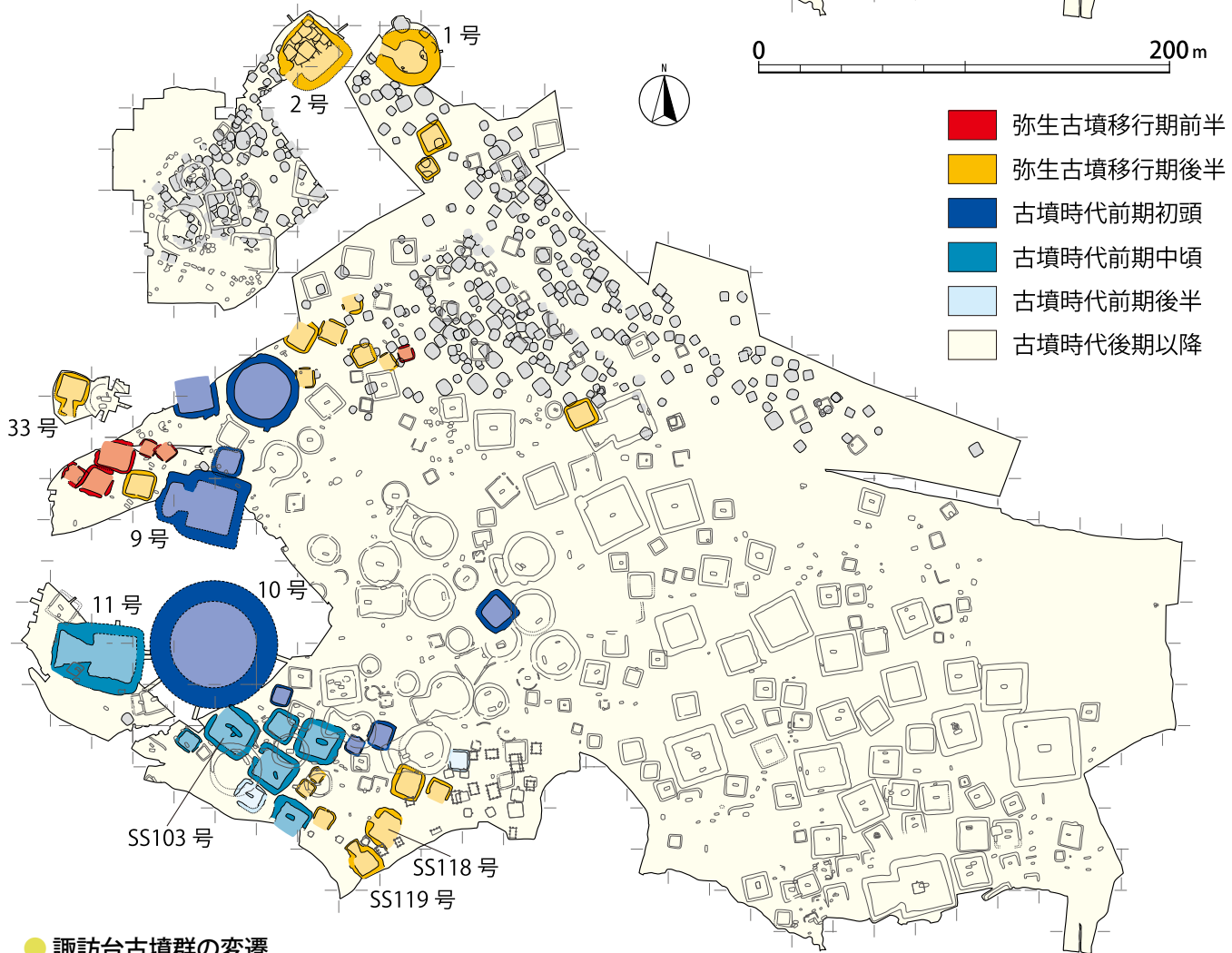
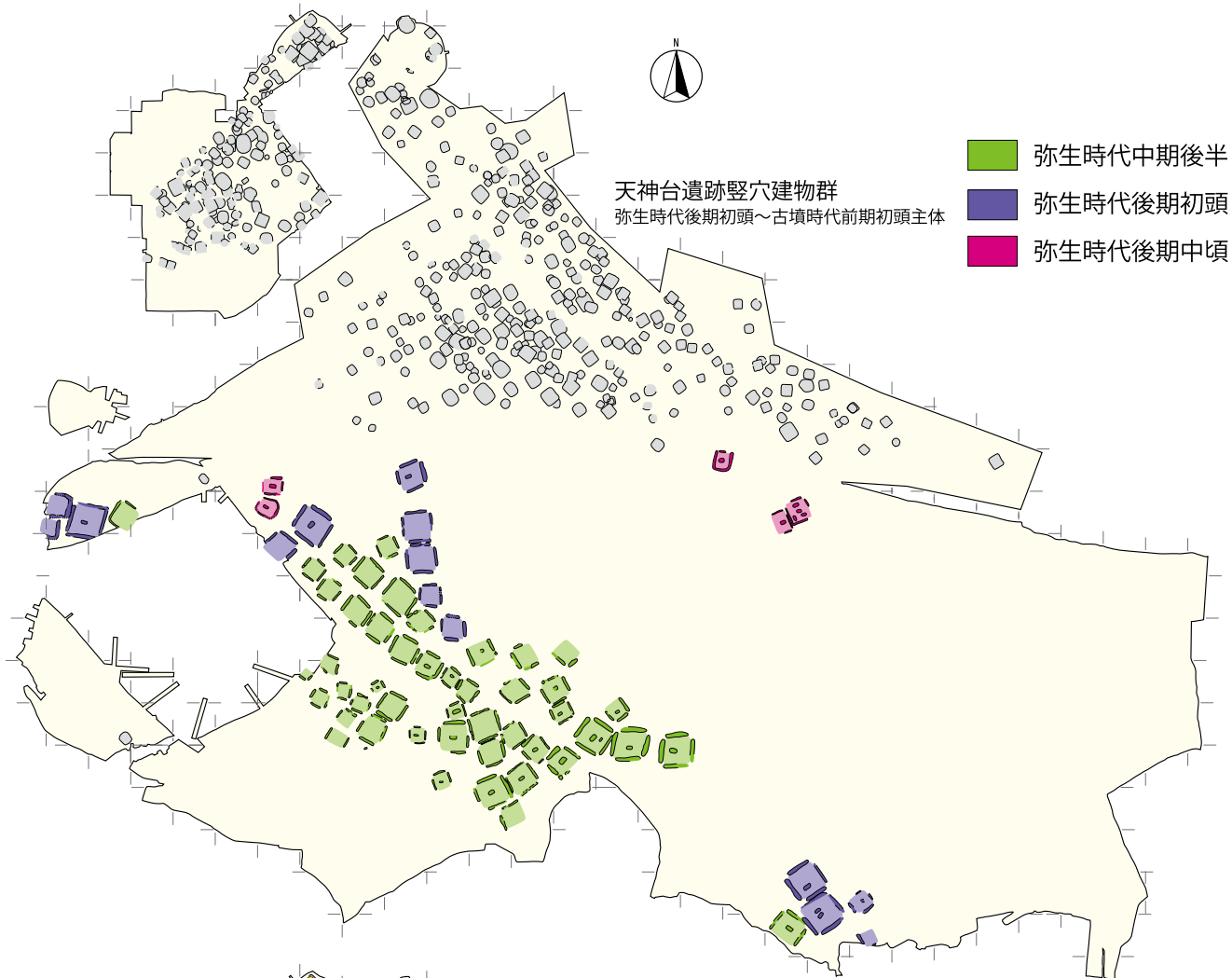
● 諏訪台古墳群



● 諏訪台11号墳（前方後方墳）、左上10号墳



● 諏訪台古墳群出土土器



● 諏訪台古墳群の変遷

祭殿建物の出現

なかで どりつむなもちばしら 中台遺跡の独立棟持柱建物と区画

■ 国分寺台遺跡群の変遷

国分寺台遺跡群の変遷は、大きく2段階に分けてみるることができます。

弥生古墳移行期前半は、B谷周辺の南中台遺跡、中台遺跡北辺部と中台遺跡西辺部北、長平台遺跡などが中心となります(p.2参照)。

弥生古墳移行期後半から古墳時代前期初頭は、A谷から養老川平野部に接する蛇谷遺跡、天神台遺跡、中台遺跡西辺部が中心となり、中台遺跡西辺部の南側には神門古墳群が造られました。また、空白となった中台遺跡西辺部北には、特殊な建物と区画が出現しました。

■ 中台遺跡の祭殿建物

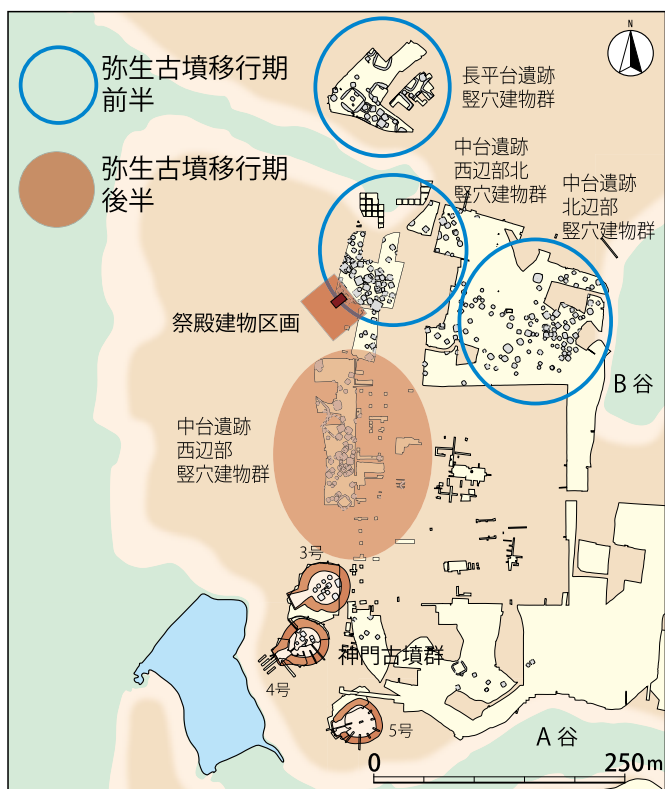
中台遺跡では、独立棟持柱建物と、上部構造は不明ですが、建物を取り囲む方形区画跡が見つかりました。遺物は出土していませんが、他遺構との関係から、この時期の建物と捉えられます。

独立棟持柱建物は、建物の外側に柱を立て、大きくせり出した切妻屋根先端の棟木を直接支え

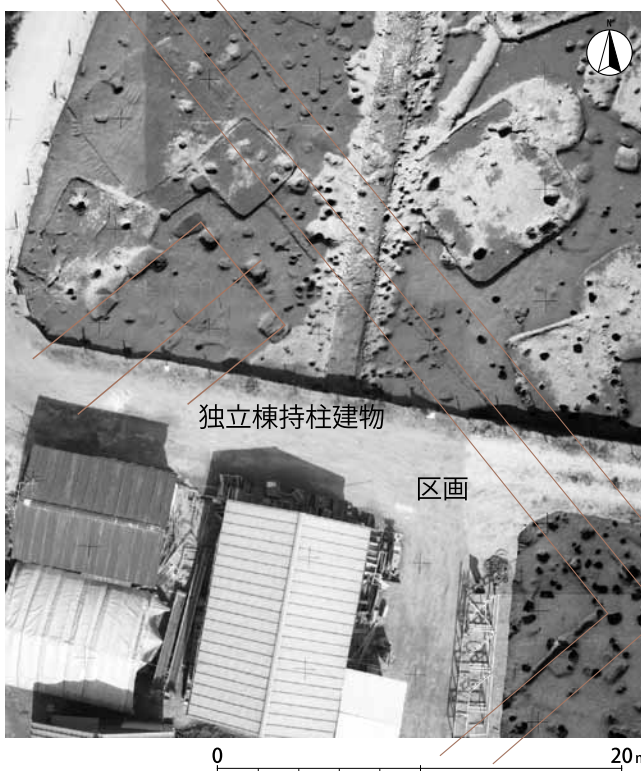


● 中台遺跡独立棟持柱建物想像復元図

るという特殊な構造であり、弥生時代の土器やどうたく銅鐸に描かれた絵画にも登場します。中台遺跡の独立棟持柱建物は、南側が調査区外となるため、全体規模は明らかではありませんが、はりま けん(6.2m) × けたゆき 3間以上(8.2m以上)を測る大型建物です。竪穴建物群から離れ、周囲を区画した建物は、地域の王が、まつりごと 政を行う特殊な場であったと考えられます。

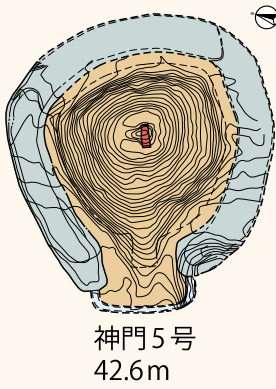


● 中台遺跡変遷模式図

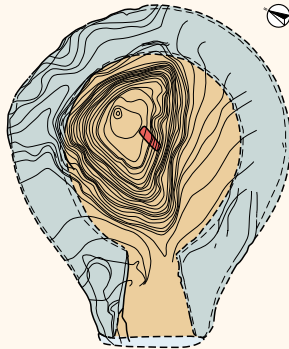


● 祭殿建物跡と区画跡垂直写真 中台遺跡

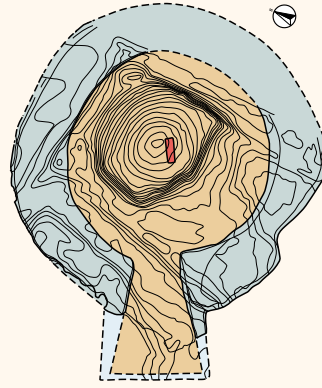
弥生古墳移行期



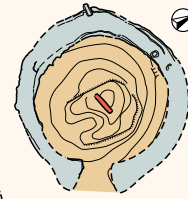
神門5号
42.6m



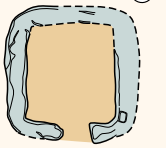
神門4号
48.8m



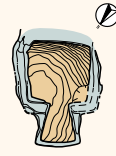
神門3号
復元推定 53.5m



小田部
22.0m



東1号
17.7m



諏訪台SS119号
16.4m

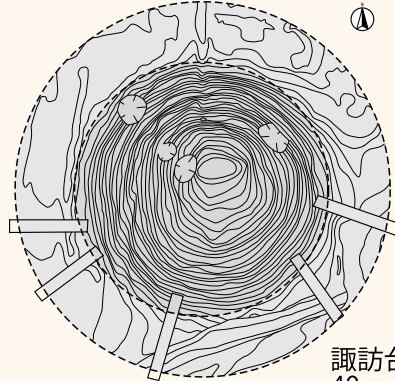


諏訪台SS118号
残存部 14.5m

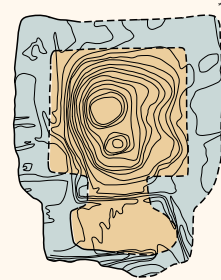


諏訪台33号
18.0m

古墳時代前期初頭



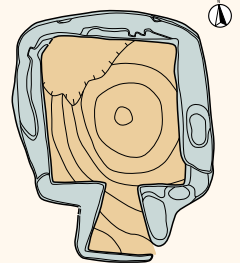
諏訪台10号
40m



諏訪台9号
35.3m

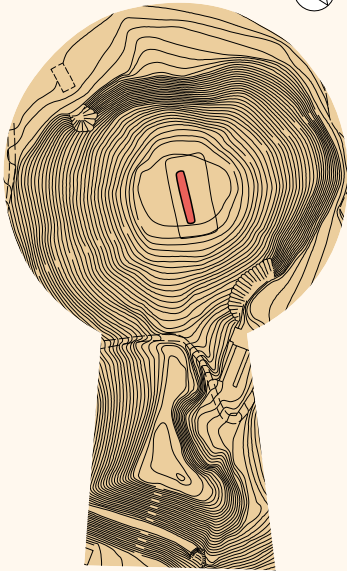


とうかんべた
東間部多16号
22.5m

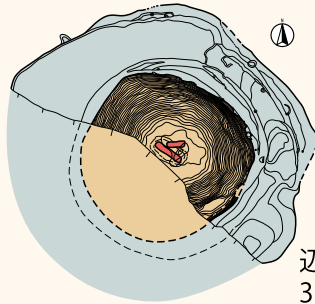


東間部多2号
35.5m

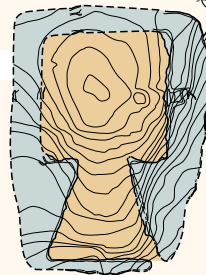
古墳時代前期中頃～後半



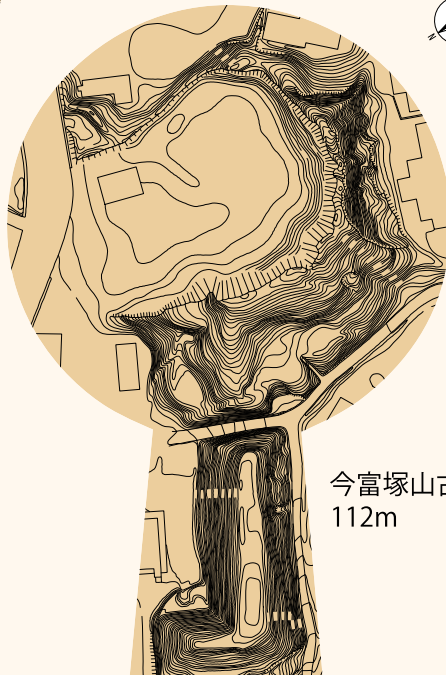
釈迦山古墳
93m以上



辺田1号
32.2m



諏訪台11号
39m



今富塚山古墳
112m



姉崎天神山古墳
128m

●「いちはら」の王墓

0 100m
(1/1,250)

邪馬台国の視点 考古学の年代

邪馬台国を考古学から議論する上でキーポイントになるのが、考古学の年代です。邪馬台国に関しては数多くの図書が出版されていますが、著者の考えている年代を知ることが、著者の考えを読み解くキーになります。

考古学では、遺跡、遺構、遺物から、西暦何年といった実年代を直接知ることはできません。文字資料が普及した時代であっても、年代を記載した文字資料が出土しない限り年代を知ることができません。自然科学的な年代測定法もありますが、分析対象と条件が限られます。

考古学では、遺物として最も一般的な土器の文様や形の変遷を捉え、標準となる特徴を「型式(様式)」とし、型式の序列を時間軸(土器編年)としています。

しかし、^{しょうないしき}庄内式土器が使用されていた時期、「庄内式期」が西暦何年頃かは、土器編年の中から導き出すことはできません。邪馬台国の王都としての説が有力な^{まきむく}奈良県纏向遺跡は庄内式期を中心としますが、王都としての評価は、庄内式期が西暦3世紀前半を中心とする時期であることを前提とします。庄内式期が西暦3世紀後半であれば、纏向遺跡の見方、考え方は変わってきます。

土器編年と実年代の調整には長い研究の歴史があり、裏表紙の小林説は、当時の^{すじん}崇神天皇の年代を古墳時代開始年代の根拠としています。田辺・佐原説は、中国史書の記事にある倭国乱と、防御機能をもつ集落の盛行時期(畿内第四様式)を重ねた、ある意味素朴なものでした。

現在、弥生時代に関しては、中国新王朝(西暦8~23年)の^{かせん}「貨泉」など、実年代が特定できる中国の文物の出土事例が近畿地方でも蓄積されつつあり、さらに近年、自然科学的な年代測定法の精度も向上しています。しかし、まだまだ定説はありません。今後の議論の進捗によって、邪馬台国論争の行方は変わってくるかもしれません。



● 山田橋式土器 市原市山田橋遺跡群

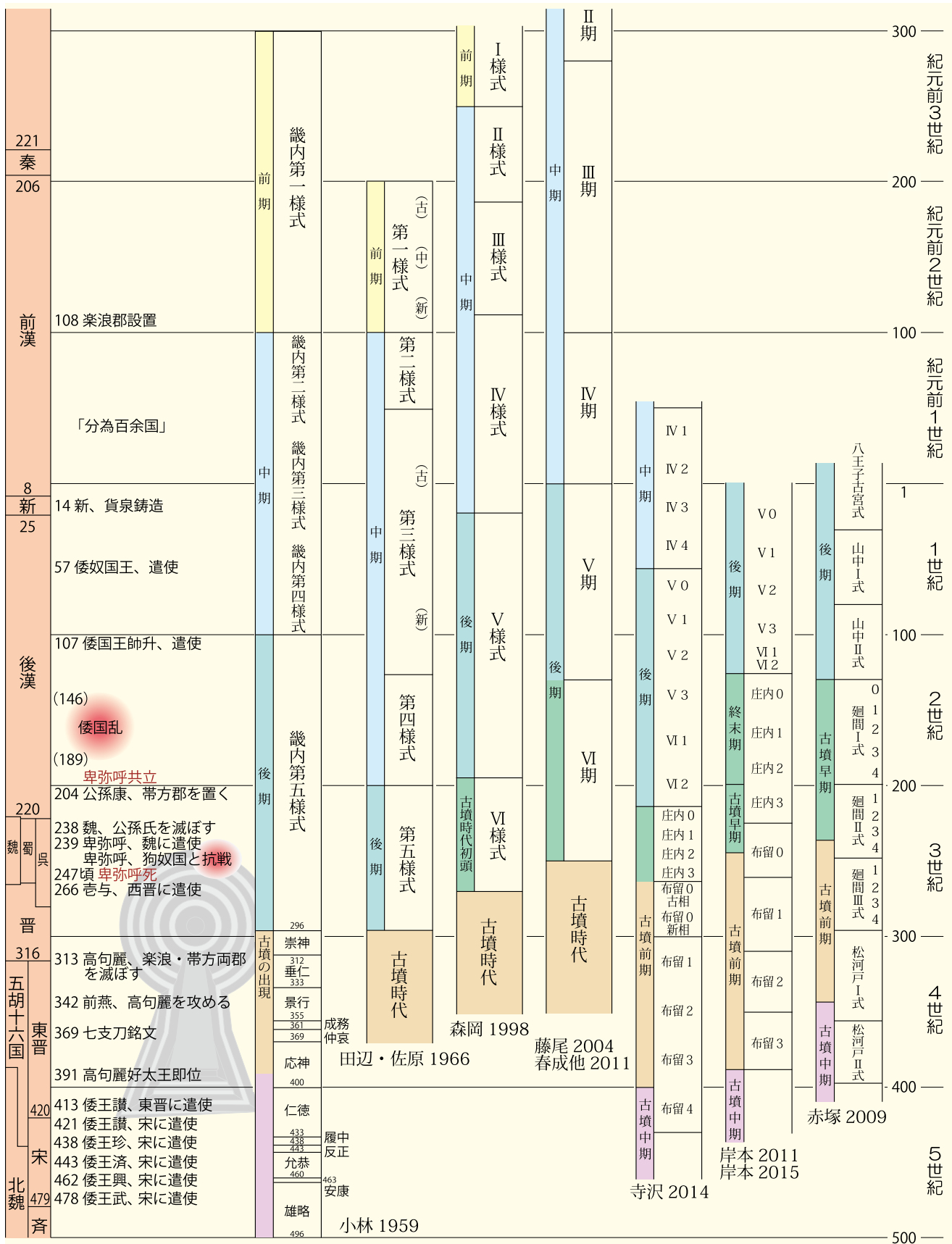


● 中台式土器 市原市中台遺跡

	南関東房総	伊勢湾沿岸 赤塚次郎 編年	畿内 寺澤 薫 編年
弥生後期	やまだばし 山田橋式	山中Ⅱ式	第Ⅵ様式
移行期 <small>弥生終末期・古墳早期</small>	中台Ⅰ式	廻間Ⅰ式	庄内Ⅰ式
	中台Ⅱ式	はさま 廻間Ⅱ式	庄内Ⅱ式
古墳前期	草刈Ⅰ式	廻間Ⅲ式	布留Ⅰ式
	くさかり 草刈Ⅱ式	まつかわど 松戸Ⅰ式	布留Ⅱ式
	草刈Ⅲ式		布留Ⅲ式
			ふる 布留Ⅳ式 <small>古新</small>

● 土器編年と併行関係

- 小林行雄 1959『世界考古学体系』3 平凡社
 田辺昭三・佐原真 1966『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社
 森岡秀人 1998『古代史の論点』4 小学館
 藤尾慎一郎 2004『弥生時代の実年代』学生社
 春成秀爾ほか 2011『国立歴史民俗博物館研究報告』163
 寺沢薫 2014『弥生時代の年代と交流』吉川弘文館
 岸本直文 2011『古墳時代の考古学』1 同成社
 岸本直文 2015『考古学研究』62-3 考古学研究会
 赤塚次郎 2009『幻の王国・狗奴国を旅する』風媒社



本書は、第4回遺跡発表会の参考資料として作成しました。

講演 平成28年3月5日 会場 市原市市民会館小ホール
 赤塚次郎「2・3世紀、東京湾に到達した東海系文化と狗奴国幻想」
 寺澤薫「倭国の新生と東国 纏向王権誕生の意義」ほか
 展示 平成28年2月27日～3月13日
 会場 市原市埋蔵文化財調査センター



ここまでわかった市原の遺跡
 第4回遺跡発表会

邪馬台国時代のいちほら

平成28年3月5日
 市原市埋蔵文化財調査センター
 千葉県市原市能満 1489 番地

まいどろ

市原市埋蔵 検索